

# おしお

第 5 8 号

3 5, 1 2, 2 0

## 目 次

卷 頭 言	調 査 部 長 別 府 義 輝	1
ハマチ蓄養試験第一報 (4月～8月の中間報告)	調 査 部	3
各 部 日 記	編 集 部	4 5
奄 美 短 信	大 島 分 場	4 7
分 場 日 記	大 島 分 場	5 3
編 集 後 記	編 集 部	5 4

鹿児島市塩屋町十八番地の七

## 鹿児島県水産試験場

## 調査会の答申を見て

調査部長 別府 義輝

農林漁業基本問題調査会が内閣総理大臣に最終答申の形で提出した「漁業の基本問題と基本対策」なるものが極く最近配布された。本文100頁参考附表150頁の2部からなるかなり大部のものであるが、一瞥して従来のこの種答申と異なる新鮮さと卒直さがうかがわれる。

しいて悪くいえば理想主義者のクーデター目論見書とも評し得ないこともなからうが、ウシウシと数字ばかり並べ立てて縁もゆかりもないような日和見的結論を引出すのに比べると今後のものは、いささか潮の香が感じられるし、あゝでもない、こうでもない、と困じ果てている我々末端の試験研究員に対しても一つの安らぎと、将来の事業方向の示サを与えるものがある。といってみても手離しで喜んでいる訳ではない。述べるところによれば「基本政策の目標」を経済的合理性と社会正義に基づく二側面を統一した形で設定するのだとの結論であるが、こんなところで「社会正義の実現」などという人類普遍の原理をしかつめらしく打出さなければ行文の体裁がつかないほど、漁業の世界がいびつな育ち方をしていること、のみ薬や、まじない丈ではもうどうにもならない程こうもうに入つた病患であることを感じ取らない訳にゆかない。なかでも現行漁業制度や就業構造、経営構造の前時代性を勇敢に指摘し真向から批判を浴せている点は、よしそれが所得倍增計画の中の農漁村人口4割論の背景に支えられているにせよ、立派であり、今まで誰もが思い、しかも誰もが言い得なかつた点をえぐつたものと思う。

我々の地方水試の行う試験研究にはその広さや深さにおいて無形の制約が働き、とかく速効的効果を期待できそうなものに手が動きやすいのであるが、国の動き、世の動きというような大きな然も正しい土台の上にのせて、テーマの選定をしないと、試験場の試験だつたり、単なる予算ふくらまし作業に終つてしまう結果を来す。

何れ遠からず政府の手によつて、具体的な立法化が進められることになろうが、漁業が時代の片すみにおきざりにされないような方向での改革を期待したい。

地方水試での研究が花さき結実するための条件として、先づ合理的な漁業の組立てがなされることであり、一方良い技術は生長発展し、不合理なやり方は萎んでなくなつてしまふような健全な淘汰の過程が現実の漁村に展開されてこそ経済合理性と社会正義の貫かれ得る漁業社会といい得るであらう。

## ハマチ蓄養試験第一報

(4月～8月の中間報告)

調査部

### § 試験の概要

近時、沿岸漁業の不振は目に余るものがあるが、その原因の一つとして魚族資源の減少があげられ、獲る漁業から増して獲る漁業への転換が叫ばれている。

全国各地でいろいろの対策が講ぜられているが、その中で蓄養事業も大きな問題として取り上げられようとしている。すでに瀬戸内海 初め三重県・宮崎県ではハマチ・フグ等の海魚養成が行われ、大体に於て、好結果を収めつつある。本県でも34年度、沿岸漁業振興対策補助で垂水市牛根熔岩に魚類蓄養場を設置し、鹿兒島湾魚類振興協会において先づ、ハマチの養殖を試みたが、失敗に終り、后、アジの短期蓄養を行つて、アジ蓄養味噌干加工等にやゝ良好な成果を収めた。

今年度は引続き、4月中旬から5月下旬にかけて大隅海峡で採捕したブリ稚魚の養成試験を同蓄養場で実施した。

試験は、一応、7月末までとし、8月1日、振興協会に生育魚を販売した。

なお、本場では8月27日まで現地に駐在して生育状況の観察を行つた。

### ◎ 蓄 養 場

- 場 所 垂水市牛根熔岩
- 地 勢 蓄養場の設置されている場所は、以前、桜島

と大隅半島が海をへだて、いて、瀬戸海峡と称せられていた処で、当時、水深約50尋あり、湾内の上下潮流の主な通路であつたが、大正3年1月の桜島大爆発時に噴出した熔岩によつて同海峡は完全に閉塞され、現在のよ  
うな入江が形成されたのである。従つて蓄養場北側は熔岩が累々として高さ約90米に及び、南側は岩類処々に露出せる潤葉、針葉樹林が險峻にして迫り、頂高約325  
mに及んでいる。

入江は東向きに開口し、蓄養池最深部は大潮満潮時約2/m、平均水深約7mとなつている。入江開口部では約40m深となつてかなり急深である。

#### ○設備の目的

本県沿岸漁業の振興を図るため鹿児島海湾海域を一般指定海域として水産庁長官の指定を受け牛根熔岩入江に共同蓄養施設を造成し、漁獲物の蓄養を行い、もつて沿岸漁業における生産の増加、生産性の向上、経営の合理化を図り漁家経済の安定及び漁民生活の向上を期するものである。

#### ○施設とそれらの工事

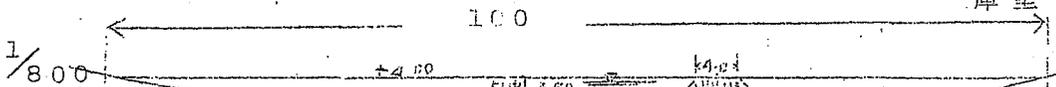
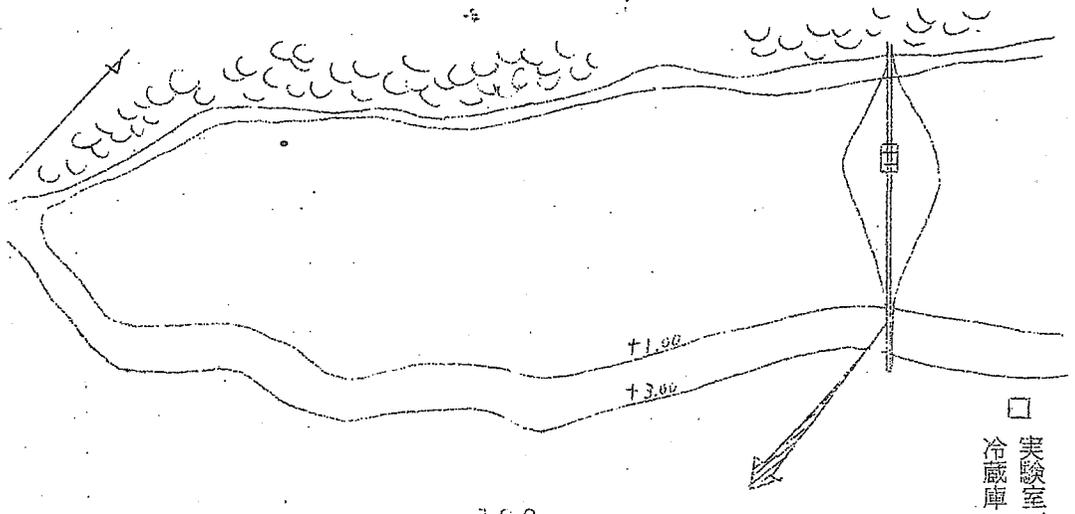
##### A、蓄養池施設

桜島熔岩地帯と牛根海岸とを熔岩7,336m<sup>3</sup>をもつて沈設閉塞し、海産魚類の蓄養場を設置。

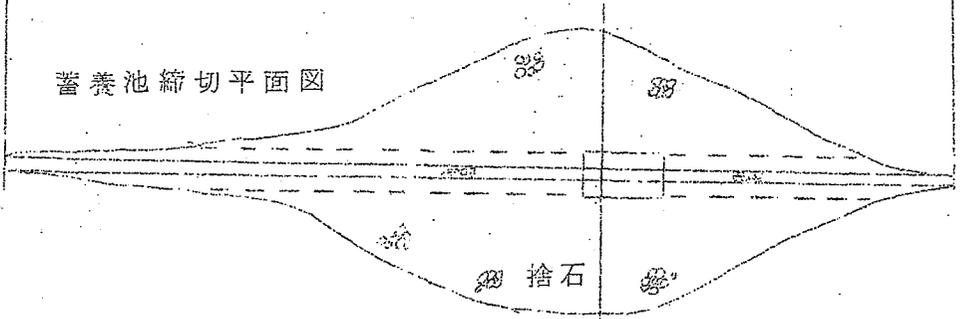
側壁は門扉を除く、上層部をコンクリート舗装して補強を行い、蓄養場の流通を効果的ならしめるため開閉の水門を作つた。水門には、その開閉を自由ならしめるため撻揚機を設置を行つた。



蓄養池平面圖 1/2400

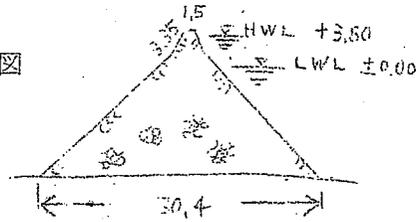


蓄養池縮切縱断面圖



蓄養池縮切平面圖

蓄養池縮切橫断面圖



B、餌料保蔵用冷蔵庫

餌料を常時確保し、合理的な投餌計画を行うため、冷蔵庫施設とこれに必要な給水工事を行った。

◎冷蔵庫の各室の大きさ、及び室温

室名	間口×奥行×室高	坪数	温度
冷蔵庫	9尺×12尺×8.5尺	3	5℃～-7℃
準備室	6尺×12尺×8.5尺	2	0℃～-2℃

◎冷凍機並びに電動機

- 冷凍機 フレオン12冷凍機ユニット型（自動式）
- 電動機 3 HP

C、曳航網 2 統

従来竹生簀の欠陥を補い一時に大漁の魚群を運搬するものでクレモナ網で造った。

D、蓄養網 2 統

大量漁獲魚の一時蓄養をなし、価格維持調整等を行うため、クレモナ網を造った。

8 種苗と、その運搬

種苗は4月11日から5月末まで試験船かもめ、ちどり丸を使用して大隅海峡 主に観音崎沖附近海域で採捕したもので、魚体の大きさは、尾叉長 (FL) 20～120mmで就中30～40%、体重0.6gr のものが多かった。

採捕したブリ稚魚は船の活魚槽に入れて、根拠地の大泊港に運搬し、大小を選別して設置していた生簀網に7～10日間蓄養后（蓄養中は投餌）試験船の活魚槽で1,000～1,5,000尾つつ7回に分けて蓄養場へ海上運搬した。

○運搬月日と尾数……………実際受入尾数

第1回	4月23日	1,100 (採捕時尾数)	1,034
2	5月 8日	6,000 ( " )	2,301 (5月16日算数)
3	5月21日	15,000 (20日)	9,799 (5月25日算数)
4	5月27日	15,000 (採捕時尾数)	14,236
5	6月 3日	2,938 (6月2日算数)	2,820
6	6月 5日	8,100 (採捕時尾数)	7,900 運搬中200死
7	6月 7日	11,940 ( " )	11,640 " 300死

運搬尾数 ( / 部は採捕時尾数で算定してあるため、実際には共喰等による減で実数はやゝ少ないと思われる ) は、  
 0.573尾、蓄養場実際受入尾数 ( 運搬後2、3～10日してから数えた尾数で、それまでの斃死尾数も含まれる。併し運搬後、算数までの共喰数は不明 ) は49,730尾で、減数10,848尾 / 7.9%とかなり大きな数字を示している。この内訳は、輸送中の斃死が、50尾で0.825%、その他の大部分が共喰による減少とみられる。これは、採捕后における投餌方法、魚体の選別、輸送前の活しめ等  
 に問題があるようである。即ち、魚体の選別はできるだけ何回も行う方が良結果を得られるようであり、餌は絶えず飽食させる位に与えた方がよいものと思われる。又、一般に魚の輸送に際しては前以て2～3日活しめすることが常識とされているが30～40mm内外の小さなブリ稚魚では輸送前に活しめすることは、却つて共喰等を惹起する一因ともなるのではないかと思われる。魚体の選別については、その取扱に細心の注意を必要とするが、更に魚体を傷つけない最適な方法を見出すことが今後に残された課題と云えよう。

## § 蓄養方法

大泊から運搬した稚魚は先づ、小型生簀網（1K×1K×1K・クレモナ網6×6本 90径）に100～2,000尾を入れて、2～3時間后から投餌した。

採捕后、すでに大泊において充分、餌付けされていたので、養餌は最初から活潑であつた。

約30g以上に生育したとき池に放流することとし、それまでの期間は小型生簀網或いは、2K生簀網（2K×2K×7尺・クレモナ本目網 13節）〔この網には約30g以内の生育し、池放流直前の魚体を活した〕で蓄養し、最初の間は、午前7時から2時間毎に1日6回投餌、6月10日から5回、20日から3回投餌とし、池放流の魚には朝7時と夕方5～6時の2回とした。小型生簀網は硅藻等のヨゴレが附着して生簀網内の潮流を阻害するため、6月中旬までは5～7日目毎に、それ以後は3日目毎に、2K網では約1週間毎に網替えを行つた。

投餌量は1日当り、大体、蓄養魚体重の約30%を見当としたが、日々の投餌量は魚の状態によつて変えた。

7月以降は大体20%内外の投餌量としたが、実際の割合はやゝ下回るのではないかと思われる。

## § 海況

蓄養場の環境条件を充分把握して、魚類の健全な養成を行う目的で、蓄養場の略々最深部において毎日午前10時に定点観測を行つた。

### 観測項目

- a、気象………天候、風向力、気温、雲量
- b、海況………水温、PH、透明度、塩素量、溶存酸素

## 1) 水温の变化

〔4月〕 表面最高 $19.5^{\circ}\text{C}$ 、最低 $16.6^{\circ}\text{C}$ で平均は約 $18^{\circ}\text{C}$ である。4月初めの $16^{\circ}\text{C}$ 台から月末には $19^{\circ}\text{C}$ 台に漸次上昇している。

10米層は変化少なく、15日頃まで $16.5^{\circ}\text{C}$ 内外、以降月末までは $17^{\circ}\text{C}$ 内外を示している。上下層の温度差は最大約 $2.5^{\circ}\text{C}$ 、一般に表層が高温を示すが18日は下層が $0.4^{\circ}\text{C}$ 高い。

〔5月〕 表面最高 $22.35^{\circ}\text{C}$ 、最低 $19.05^{\circ}\text{C}$ 、平均約 $20.8^{\circ}\text{C}$ で4月より $2.8^{\circ}\text{C}$ 高くなっている。

10米層は最高 $19.9^{\circ}\text{C}$ 、最低 $17.65^{\circ}\text{C}$ 、平均約 $18.8^{\circ}\text{C}$ 、4月より約 $2^{\circ}\text{C}$ 高い。

上下層の水温差は最大約 $3.7^{\circ}\text{C}$ 。月末29~31日は下層が表層よりやや高目である。

〔6月〕 表面最高 $25.5^{\circ}\text{C}$ 、最低 $21.06^{\circ}\text{C}$ 、平均約

$23.5^{\circ}\text{C}$ 。前月より $2.7^{\circ}\text{C}$ 高い。上旬は $21^{\circ}\text{C}$ から $24^{\circ}\text{C}$ まで上昇しているが中旬下降して再び $21^{\circ}\text{C}$ 台を示し、以後、上下変化しながら月末には $26^{\circ}\text{C}$ に達している。

10米層は最高 $22.67^{\circ}\text{C}$ 、最低 $19.6^{\circ}\text{C}$ 、平均約 $20.8^{\circ}\text{C}$ で前月より約 $2^{\circ}\text{C}$ 高い。月初めの $19.6^{\circ}\text{C}$ から漸次 $22.6^{\circ}\text{C}$ に上昇している。上下層の水温差は全般的に前月より大きく、最高 $4.5^{\circ}\text{C}$ である。

〔7月〕 表面最高約 $30^{\circ}\text{C}$ 、最低 $26.25^{\circ}\text{C}$ 、平均 $28^{\circ}\text{C}$

10米層最高 $26^{\circ}\text{C}$ 、最低 $22.4^{\circ}\text{C}$ 、平均約 $24^{\circ}\text{C}$

前月に比べて表面で平均 $4.5^{\circ}\text{C}$ 、10米層で $3.2^{\circ}\text{C}$ 高くなっている。表面では2日に約 $30^{\circ}\text{C}$ という高水温を示した

が翌3日から15日までは27°C内外、以後は28~29°Cで31日には29.5°Cに達している。10米層も他の月に比べてやゝ変動が大きく高低差は約3.5°C、即ち上旬の22°C台から中旬には25°C台に達したこともあるが再び下降して20日には22.8°Cとなり以後、月末の26.1°Cまで上昇している。

上下層の水温差は今月が最も大きく最高7°Cを示している。

〔8月〕 (26日までの分)

表面最高 30.5°C 最低 26.7°C 平均 28.4°C  
10米層最高 27.9°C 最低 25.5°C 平均 27.2°C  
前月に比べ表面で0.4°C 10米層で3.2°C高くなっている。表面水温は3日 30.5°Cと最高を示したが8~10日には27.5°Cに低下して、下層水より低温を示している。以降、やゝ上昇して28°C台となっている。

10米層は月初め26°Cから8日以降は28°C台が続いている。

以上、通覧してみると表面水温で20°C以上を示すのは5月上旬から、25°C以上を示すのは6月末からで、30°C以上は8月初めに2~3日みられただけで、以後、漸次低下の傾向を示している。

10米層で20°C以上となるのは6月上旬から、25°C以上となるのは7月下旬からであつて8月に入って表面水温が低下し初めても10米層水温は小康状態を保っている。

## 2) 塩素量の変化 ‰

〔4月〕 表面最高 18.7‰、最低 13.8‰、平均約 16.2  
中旬 17 内外でやゝ高カンを示している。

10米層は 18.8 内外で変化少なし。

[ 5月 ] 表面最高 / 7, 6、最低 / 3, 0、平均約 / 5, 4  
で4月より平均 0, 8 低かんとなつている。

10米層は最高 / 8, 8、最低 / 6, 9、平均 / 8, 5。  
表面の変化をみると、中旬 / 7内外でやゝ高かんとなつて  
いるが5日前後と20日前後は / 3 ~ / 4 と低かんを示し  
ている。

[ 6月 ] 表面最高 / 7, 1、最低 / 2、平均 / 4, 6  
で前月より平均 0, 8 低かんとなつている。

10米層は前月と殆んど変わらず平均 / 8, 5。9日 / 7  
に低下したのと28日 / 9, 5 と高かんを示しているのが  
特異である。

[ 7月 ] 表面最高 / 8, 3、最低 / 3, 8、で前月より平均  
2, 2 高かんを示しているが、10米層は / 8, 2 でやゝ低  
かんとなつている。

[ 8月 ] 表面最高 / 7, 6、最低 / 4、平均 / 6, 2 で  
前月よりやゝ低かんを示すが、10米層は前月と殆んど変  
らず。

通覧するに、10米層は / 8 台で比較的安定しているが  
表面は降雨などの影響を受けて、かなり大きな変化がみら  
れる。 / 4 ~ / 7 の場合が多く最低 / 2 で、ブリ生育  
に支障を来たすという程のことはない。

### 3) 酸素飽和度の変化

[ 4月 ] 表面では 87 ~ / 101 % で比較的变化少なく、  
10米層では 76 ~ 98 % と表面より低い。表面より下  
層が高い場合も2回程みられた。

[ 5月 ] 表面は 56 ~ / 103 %、中・下旬各 / 回 50 % 台  
まで低くなつているほかは 90 % 内外を示している。

下層は70~102%で表面同様かなりの上下変化がみられる。表面より下層の高い場合が10回みられた。

〔6月〕 表面は78~116%で過飽和状態が8回みられた。10米層は69~104%で90%内外の場合が多く70%内外は2回程あつた。

〔7月〕 表面は80~121%とかなり高く、過飽和状態も10回みられた。10米層は55~113%で上下変化著しく過飽和状態が3回、60%内外の飽和度が下旬に4回みられた。

〔8月〕 表面は69~101%で10日前後と25~6日にやゝ低く70%内外を示している。

10米層は22~72%で平均55%と前月までの飽和度に比べて著しく低くなっている。特に18~19日は20%台で危険な状態を示している。

以上、酸素飽和度は表面においては問題はないが、下層において著しく低下することがある。(8月)

元神戸大学 橋高氏によれば、夏の酸素飽和度の減少は、魚の放養量を制限する一つの大きな要因になるとのことであるので、この点については当蓄養場においても考慮すべきで今後の課題と云えよう。

4) アンモニヤ態窒素の変化(単位は $\gamma$ -atoms/l で表わす)

〔4月〕 表面0~4、10米層0.5~4で上下層殆んど同じような変化をたどっている。

〔5月〕 表面・10米層共に0.5~4.5で上・中旬やゝ多く下旬少なくなっている。

〔6月〕 表面0.5~3.5 10米層0.5~4.5で平均としては前月よりやゝ少ない。

〔7月〕 表面0.5~1.0、10米層1.0~6.5

表面では上旬から中旬初めにかけてやゝ多く、特に6日は1.0と多くなっている。中旬後半から下旬にかけては1~2内外となつている。

10米層は平均で表面よりやゝ多く、特に中旬後半以降は表層に比べて何れも多くなっている。

〔8月〕 表面1.0~16.5、10米層1.0~16.0で何れも上下変化が著しい。9日は上下層共に急激に多くなつて16~16.5を示している。上旬は殆んど表面が下層より多いが、それ以後は下層が10以上を示している。

以上、4~6月は何れも4.0以下で略、同様の値を示しているが、7月更に8月は多くなつて、上下変化も著しい。

瀬戸内海各地の養魚場においては8~9月一般に1.0~4.0の範囲であるが、淡路島の福良では1.73~22.4とかなり大きな値もでている（橘高氏資料による）

#### 5) 硅酸塩の変化

表面は4~6月170~280 平均150~200で、かなり上下変化がみられるが、各月とも大体、似たような値を示している。7月になれば上旬の5~7日に280~290と高い値を示すが、中、下旬は20~150、平均80と低くなっている。8月は上旬平均110、中下旬平均140とやゝ高目を示している。

一方、10米層は70を示すことも稀にはあるが、殆んど各月を通じて20内外を保っている。

#### 6) O·O·D (化学的酸素消費量)

上下層共 似たような変化をたどっている。

4月上旬から6月中旬までは1内外を示しているが、6月下旬や増加して2.8を示すこともあり、7月上旬一時低くなっているが、20日には3.2~4.2の高い値を示している。8月には0.3~2.5を上下変化している。

以上において、各観測結果の間では、塩素量と珪酸塩で逆相関の関係がみられる位で、ほかは相関の関係等を確認し難い。

以上の定時定点観測の外

24時間定点観測2回

干満時観測(4日連続)1回

プランクトンの旬変化調査

等を行つた。(別報)

## § 餌料

前述のとおり、投餌量は1日当り大体、蓄養魚体重の約30%、7月以降は20%内外を見当としたが、これはあくまでも推定であつて、実際の投餌割合は全魚体を取揚げ出荷して投餌量との関係を計算しなければ、不明である。先づ、餌料とした魚種はカタクチイワシ、アジが多く、時たまハダカイワシが用いられた。

又、カタクチイワシにナメハダカ(Lestidium prolixum HARRY)〔ハダカエソ科〕が混じていることもあつた。(ナメハダカを海鰻の漁業者は方言で「レントゲン」と云う)

これらの魚は、7月までは蓄養場のある溶岩入江を根拠とする垂水市海鰻の八田絹(夔入々艘張絹)漁船が漁獲したものを主として購入した。従つて、鮮度はかなり良好で、

価格も比較的、低廉（/Kg当り8~13円、ヤ、鮮度の落ちたものに6円位）であつたが、8月は八田網漁場の変化と不漁のため、鹿児島市中央市場から冷凍魚を購入（振興協会）しなければならなくなつたため、餌料代も自然嵩むこととなつた。（/Kg当り15~20円）又、何時でも充分購入できるというわけにいかず 餌料の在庫僅少というような状態も屢々あつた。向後年、放養量を増加するようになれば餌料確保は、養魚経営管理上の大きな問題となつてくるものと思われる。

投餌量の変化は別図のとおり。

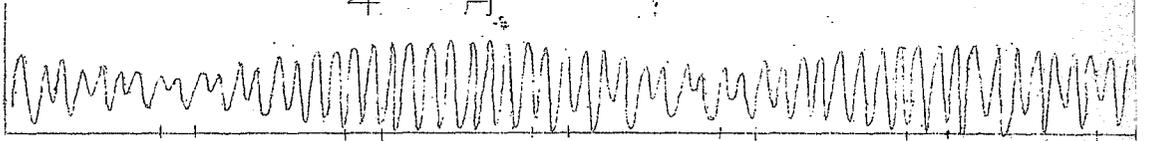
即ち、5月下旬の放養量の増加と共に漸次、投餌量も増加  
6月中旬からは、斃死、共喰などで蓄養魚体数は減じたものゝ、/尾あたり体重の増加に伴つて、蓄養総重量が増加して、投餌量も増加した。

月別、/日平均投餌量は

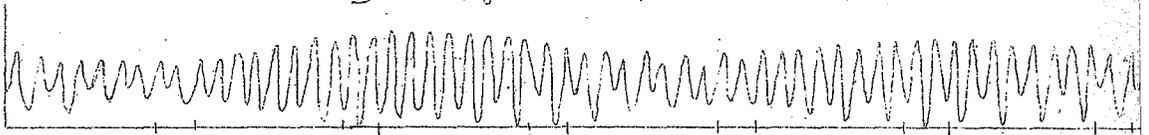
4月	1,3.4 Kg
5月	11
6月	5.3
7月	187
8月	197

各月の潮汐図

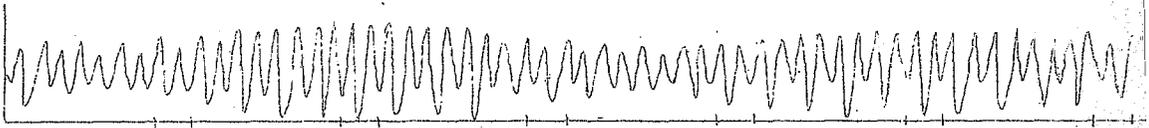
4 月



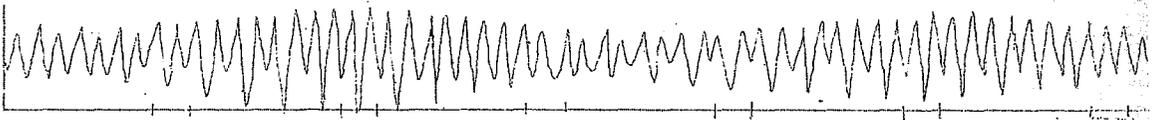
5 月



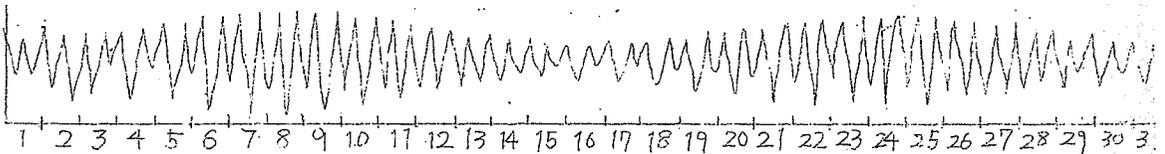
6 月



7 月



8 月



# 水溫變化表

○ 米戸

● 10米戸

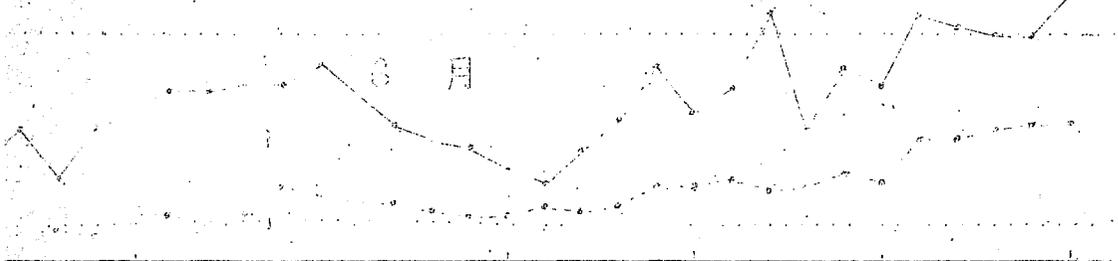
4月



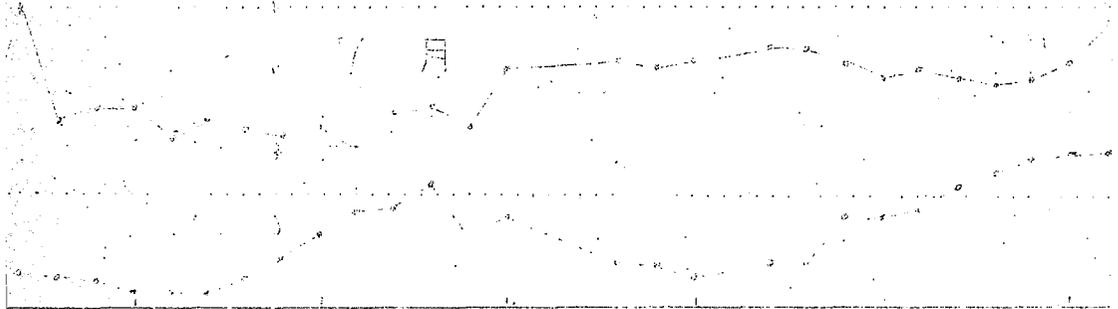
5月



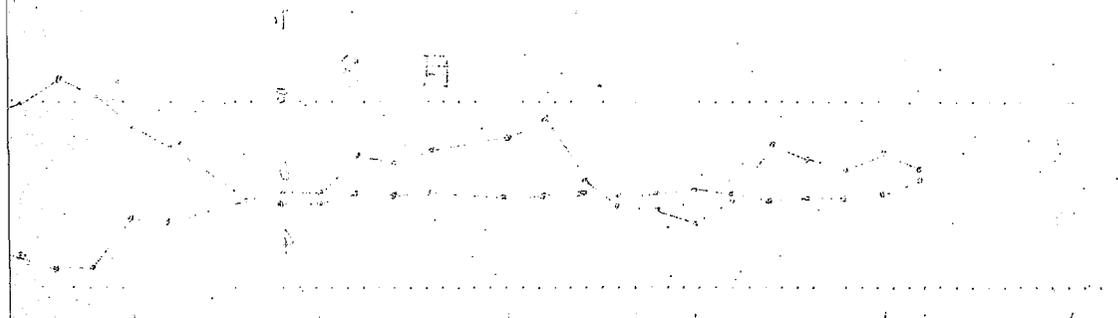
6月



7月

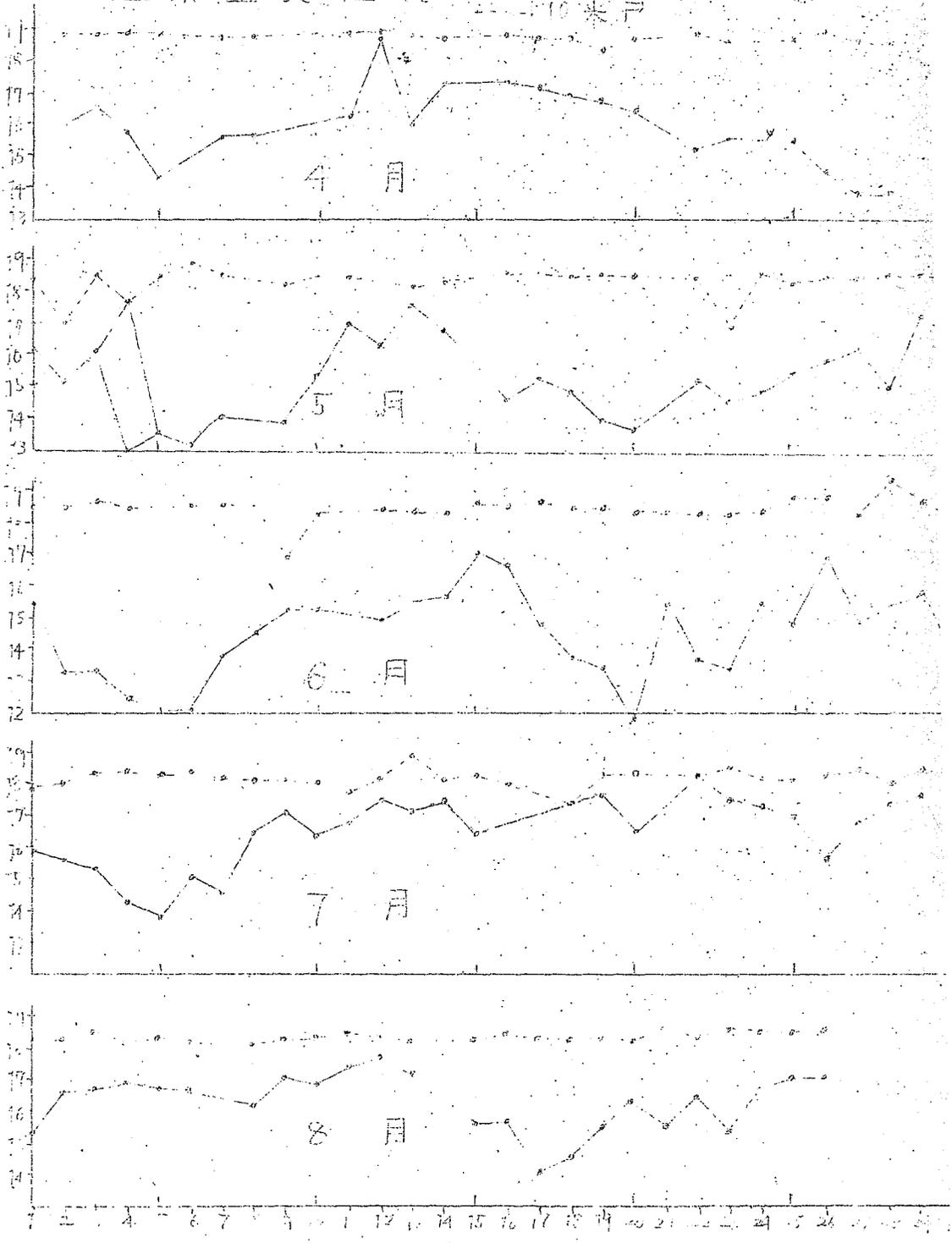


8月



1 3 5 7 9 11 13 15 17 19 21 23 24 25 26 27 28 29 30 31

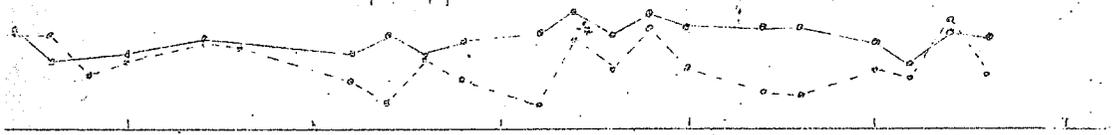
溫素量变化表 ———— 0米戶  
 - - - - - 10米戶



# 酸素飽和度変化表

— 0米F  
- - - 10米F

4月



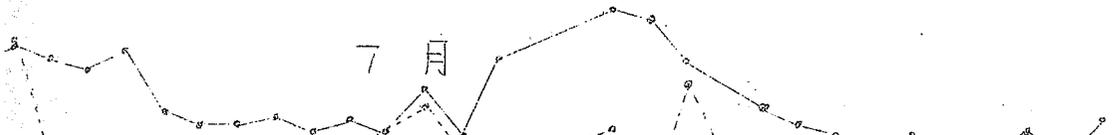
5月



6月



7月



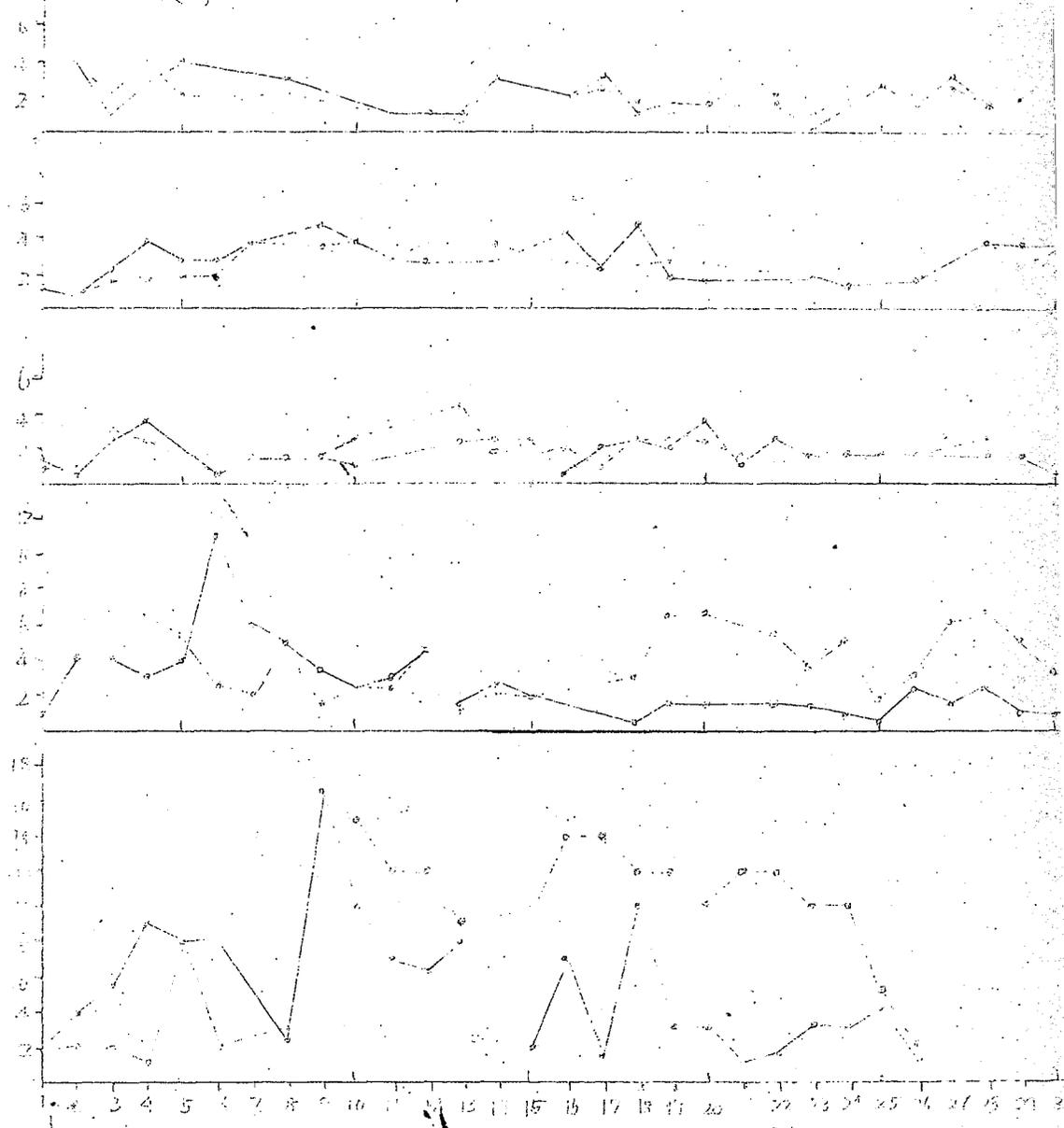
8月



2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

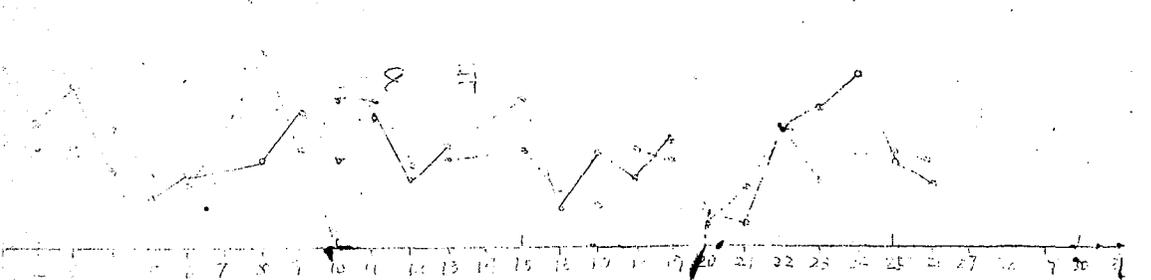
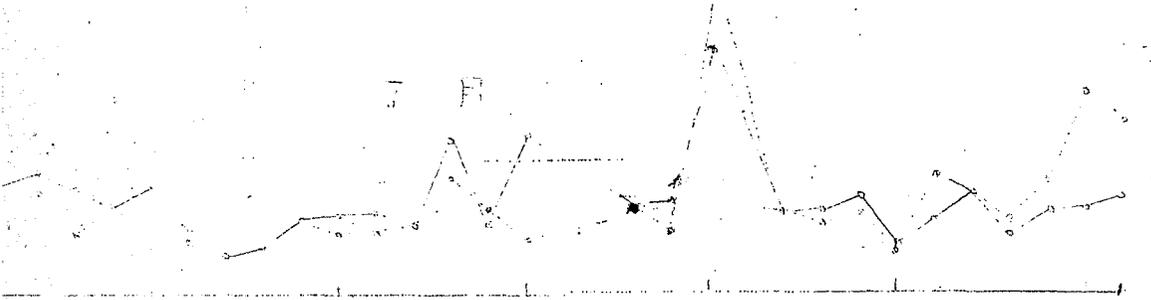
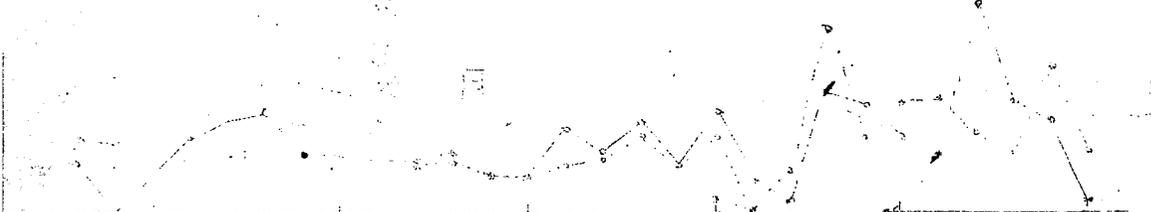
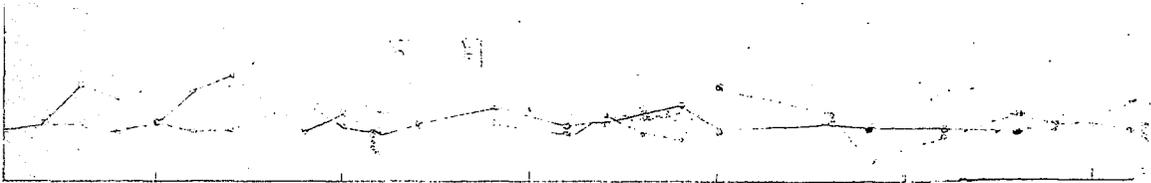
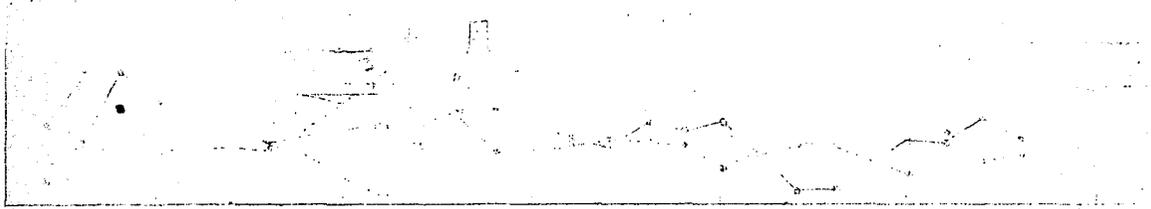
下... ..

$\mu = 0.5 - 2.0 \text{ cm}^2/\text{s}$   
 $(\sigma, \tau = 1 - 5 - 10 \text{ cm}^2/\text{s})$



# COD 变化表

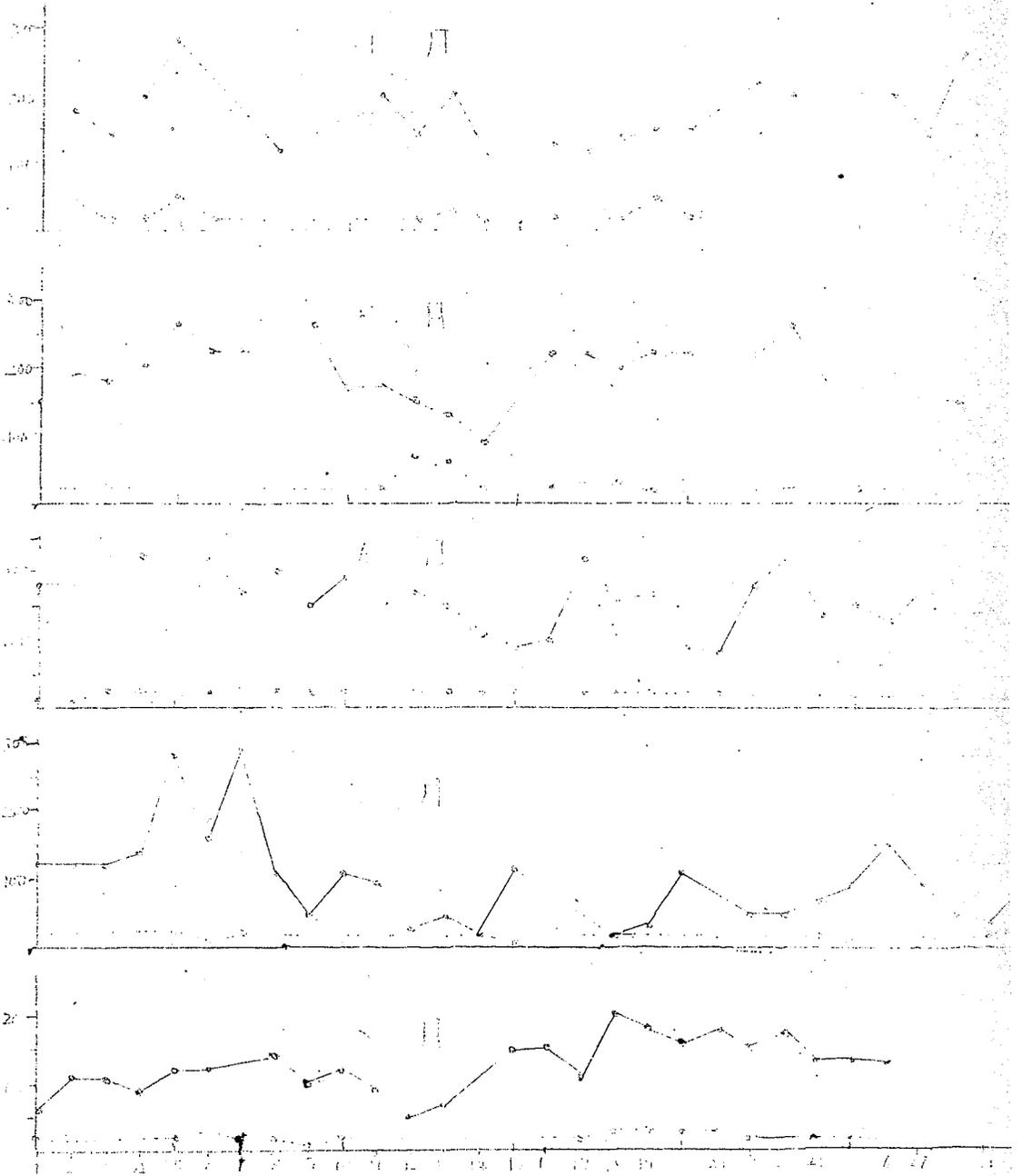
○ 表1  
● 表2



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

# 海平面变化表

— 高潮  
— 低潮



# 北 京 氣 候 觀 測 記 錄

4 月

5 月

6 月

7 月

8 月

§ 生育状況

月	受入	斃死	共喰等による減	池中放養
4月	1,034尾 内訳 4/23 1,034	41尾		
5月	26,336 内訳 5/8 2,301 5/21 9,799 5/27 14,236	544		
6月	22,360 内訳 6/3 2,820 6/5 7,900 6/7 11,640	3,678	17,977	1,486
7月		1,775	6,675	7,554
総計	49,730	16,038	24,652	9,040

◎ 月別生育状況

4月	<p>午前7時から2時間毎に1日6回投餌。 餌付き、極めて活潑。池外に設置せる小型生簀網で蓄養。1網に100~200尾つつ。 海況には異常みられず。魚体の大きさ 体長 (FL) 1.5~7.0cm 平均2.5~3.0cm 体重 (BW) 0.3~5.0g</p>
5月	<p>投餌方法、4月と同じ。上旬・下旬に2、3、6尾受入。餌付き何れも極めて活潑。 4月同様、池外に設置せる小型生簀網で蓄養。</p>

今月受入分は、網に2000尾を限度とした。

魚体の大きさ（受入時）

5月 体長 (FL) 30~90mm

体重 (BW) 0.5~8.0gr

海況には異常みられず。

6月前半期

日	記 事	斃 死
1	餌付き何れも活潑	124
2	"	123
3	2,820尾 [ FL7~1.3mm BW4~1.5gr ] 受入。池内小型網で蓄養。	7
4	池内・池外共餌付き良好。	130
5	7,900尾 [ FL4~6mm BW1~2gr ] 受入。本日より水試係員駐在。衰弱せるものあり。池内小型網で蓄養	17
6	エツキ何れも活潑。昨日分やゝ衰弱。網増設（池内） 夕方より火山灰降る。	183
7	11,670尾 [ FL3~5mm BW0.5~1.4gr ] 受入。昨夜来の火山灰のため海水溷濁するもエツキ極めて良好。	110
8	昨日分餌付やゝ不活潑。斃死多し。北東の風強し	832
9	池内、餌付良好なるも黒色魚みられ、泳泳不活	627
10	午後 降雨。5月 <sub>3</sub> 分尾数算定。（2,230尾）黒色やゝする。獲餌5回以降同し。餌付良好。	433

日	事	落 死
1/1	風(降)雨烈し。昨夜来降雨あるも池内游泳に異常なく、餌付かなり良好。池外、うねり大きく蓄養魚の一部翻弄さるる恰好となる。台風3号接近のため <del>袋</del> 補強	16
1/2	4、5月輸送分池内へ移転(7~1.2h)風波による衰弱のためか、移転魚全般的に黒色となる。投餌を減ず。	450
1/3	移転魚帯黒色。投餌を4回とする。大型魚はやゝ恢復、 <sup>6日</sup> <sub>5</sub> 分餌付やゝ不活潑。4・5月分大型魚40尾池へ放流。1300尾2K網に移す。	113
1/4	黒色魚やゝ減少。餌付良好。	43
1/5	降雨。小型魚餌付きやゝ不活潑。投餌5回	調査せず

〔概況〕5~7日受入分はすでに衰弱してきて斃死が多かったが14日頃から安定してきた。池外にあつた小型魚は台風接近による風波で網ずれしたものもあり、やゝ衰弱して帯黒色となつた。

13日初めて、40尾を放流した。(平均体重60gr)

6月後半期

日	記 事	死 斃
16	6月7日分餌付やゝ不活潑。大型魚1370尾池へ放流(平均5.2~7.5gr) 3884尾2K網へ移す。	34
17	6月7日分、昨日同様餌付やゝ不活潑。 6月8日分、1尾平均体重6.0gr	38
18	餌付き何れもやゝ良好。一部選別。	29
19	午後降雨。6月7日分一部餌付やゝ不活潑。一部選別、2K網へ移す。本日より投餌3回(7・12・17h)	24
20	昨夜降雨激し。午前中まで続く。全般に餌付緩慢。特に6月7日分一部不活潑のものあり一部選別、2K網へ移す。	20
21	本日より投餌試験開始。(投餌率10、20、40、20(人工混)%)終日風雨強し。5月分帯黒色魚数尾みらる。餌付良好(6月7日分一部不活潑)	9
22	風雨強し。餌付良好なるも5月分黒色魚増加の傾向にあるため、夕刻より投餌を減す。	12
23	5月分、黒色魚多く12hの投餌を中止。一部選別、2K網へ移す。池へ放養16尾	10
24	5月分 依然として黒色魚多し。6月分餌付良好。投餌試験魚尾数算定(共喰?等による減5、7)	20
25	黒色魚の増加は小康を保ち、全般的に体色やや恢復 12hの餌付極めて良好。池内放流のものに擦過傷を受け7尾を譲見。	20

日	記 事	斃 死
26	餌付良好なるも5月分、一部黒色魚みらる。 本日より投餌若干増加。夜、海鳥(ゴイサギ?) 3~5尾飛来のため監視。池へ放養3尾	66
27	6月分の大型魚に黒色魚みられ、投餌を減ず 5月分、昨日同様。池へ放養2尾	35
28	5月分の小型魚全般的にやせて頭や、大とな り、鼻上げ狂奔状態を呈するもの数尾あり。 (小型生簀内でもや、大型の魚体)	28
29	5月分黒色魚少なくなるも、狂奔状態を示す もの2~3尾。餌付良好。	16
30	午後、水温上昇、ヨゴレの附いた生簀では游 泳不活潑。網替後はや、活潑に游泳。池放流 魚も夕方干汐時は浮上悪し。簀に附着の硅藻 腐敗?のためか硫黄臭を感ずる場所あり。	110

【概況】 5月分小型魚は20日頃から餌付き緩慢となり、  
黒色魚増加のため投餌量を減じた。  
28日(月末)には全般的にやせて頭大となり 鼻上げ  
狂奔状態を呈するものがみられ始めた。  
6月分小型魚は漸く游泳・餌付きが活潑となつてきた。  
25日頃から水温25℃台となる。

## 7月前半期

日	記 事	斃 死
1	午後、水温上昇時には全般的に浮上少なし。従つて本日より午後の選別・網罟は中止し、午前中のみ実施することとした。投餌実験打切る。10・20%投餌分や不足の状態。	22
2	5月分、斃死や多くなる。全般的に餌付活潑なるも帯黒色魚〜著しい。頭大魚殆んど餌に付かず。5月分・6月分/網づ飽食投餌試験を開始。	99
3	2K網5月・6月分 3,044尾池放流、6月分小型網より982尾池放流。 (2K網分、 $\frac{6}{13\sim 16}$ から本日まで共喰? 等による減43%)	106
4	池放流魚かなり池奥まで游泳。小型魚も大型魚に混合して索餌。背部に擦過傷あるものあり。池へ25尾放流。	113
5	12h水温(表面)29°C、高水温のためか小舟の下に群遊するもの多し。5月分に黒色魚3尾みらる。飽食試験魚5月分、夕方より餌付き少なし。池へ59尾放流。	120
6	朝、火山灰のため海水著しく濁、餌付き不活潑。本日より投餌は魚の好む量:略飽食量を与えることとした。池へ24尾放流	99
7	5月分、小型生簀網に黒色魚2〜5尾づ見らる。池内放流魚、朝飽食投餌するに79Kg摂餌。池へ217尾放流	—
8	5月分、全般的に黒色魚や増加。投餌の際鱗上げ狂奔するものあり、これらは一般にひからびたようにやせている。斃死多し。	345
9	6月分に黒色魚2尾、投餌をや減ず。池放流魚、数尾帯黒色を呈するも、餌付き極めて良好。池へ2164尾放流。	174

日	記 事	斃 死
10	5月分、一部餌付き特に悪し。池放流魚1尾斃死。	1.3.8
11	5月分、投餌量増加しているにも拘らず全般的にやせて衰弱しつつあり。狂奔するものや増加、斃死多し。	—
12	池放流魚1尾狂奔。黒色魚や増加の傾向にある。今井助教病害魚調査。 $\frac{7}{9}$ 頃池に放流する魚群は水門・堤防近くを群遊。餌付や活潑	1
13	池放流魚1尾(黒色)横転・反転して苦悶状態を呈す。腰曲り1尾みらる。5月分(小型網)依然として餌付悪く黒色魚増加、魚体衰弱の傾向にあり。夕方海水濁著し。	4.2.8
14	池放流魚、6月分(小型網)共に浮上悪く、餌付悪し。放流魚2尾狂奔取あげ解剖するに胃内容物皆無〜僅少。6月分(小型網)夕方、全般的に黒色を呈す。	—
15	池放流魚浮上や悪し、餌付や良好となるも黒色魚増加の傾向。狂奔2〜3尾、小型網斃死多く池外へ牧を移動。魚の色調・游泳や好転するも餌付極めて悪し。	5.2.1

【概況】 高水温となり、特に午后の選別、網替作業は危険となつた。5月分小型魚は餌付悪く、衰弱して狂奔魚も毎日見られ、斃死が多くなつてきた。放流魚にも黒色魚がみられ始め狂奔・斃死するものがでて全般的に危険な様相を呈して来た。

7月後半期

日	記 事	斃 死
16	池内、浮上悪し。小型魚減少の感あり。 5月分、餌付極めて悪し。6月分も全般的に やせ細り黒やゝ多し。狂奔するものあり。	522
17	池内浮上やゝ遅し、餌付良好。池外の小型網 色調良好なるも索餌極めて悪し。	967
18	池内餌付活潑。池外小型網、餌付悪し。狂奔 魚数尾。6月分を小型網から6角網（大型） へ移す。	1827
19	池内餌付やゝ悪し。斃死5尾、1尾は黒色、 腰曲り。池外、網分黒色魚斃死多し。 餌付悪し。	876
20	魚の状況は前日同様。衰弱魚を解剖の結果、 胆のう黄色となり胆汁滲出して傷害がみらる	779
21	池内、餌付極めて良好。狂奔2尾。 6角網黒色魚多数。	7
22	夕方、池外の網で狂奔するもの多し。 池内、放流魚ハダカイワシを好撮。カタクチ アジの場合と摂餌活動異なる。狂奔2尾	164
23	池内1尾鼻上状態。黒色魚増加の傾向にあり ハダカイワシを混じて投餌、餌付極めて活潑 池外網分、依然として餌付極めて悪く、池外 5K網に全部統合。狂奔するものあり。 池内死6尾。	145
24	池内、餌付朝夕共に良好。黒少し。池内死3 尾。5K網、游泳かなり活潑なるも黒多く、 衰弱魚多し、狂奔魚2~3、網底に斃死多し	池のみ 3
25	池内、餌付極めて活潑。狂奔魚みられず。 5K網餌付悪し。	" 1
26	池内、朝夕餌付極めて活潑。水門近くに主群 中央部に小群。5K網餌付悪く死多し。	" 1

日	記 事	斃 死
27	時々降雨。池内、餌付極めて活潑。本日カタクチイワシはそのまゝ投餌。16時頃ブリ一群逃避行動?をなす。(大型ブリ又は他の普魚に追われるか)前後3回。	—
28	池内放流の小型魚に対してはカタクチそのまゝの投餌は大きすぎる嫌いあり、細断の餌あり。投餌しないときは深層を游泳。5K網の小型魚約200池に放流。(24日~28日で約3,700尾死)	3,700
29	以下、池内の魚類状況のみ(池外5K網昨日取揚げ)昨日放流の小型魚殆んど見えず餌付極めて活潑。摺餌8Kやるも好まず、夕方、餌付不活潑。	池のみ 3
30	朝、餌付活潑なるも魚体数少なし。夕方、餌付不活潑。本日最高水温31.5℃	" 3
31	餌付普通。斃死やゝ多し。最高水温32℃(表面)	" 11

〔概況〕 前半期に引続き水温上昇して、小型魚の衰弱は更に著しく餌付極めて悪く、斃死が急増した。

28日に小型魚の200尾を放流して小網による蓄養を打切った。放流魚は餌付極めて活潑なときもあつたが31日には死1-1尾となり、水温32℃、小網時を控えて懸念すべき状態となつた。

8月前半期

日	記 事	斃死
1	餌付(朝)普通。(夕)悪し。魚群の浮上悪し 最高水温28℃ 大群一時、索餌群にみられ活 潑となるも索餌中急に沈下(大魚?に追われた ものか)	18
2	(朝)浮上遅し、投餌開始后30minで大群 浮上。(夕)餌付かなり活潑。 最高水温31.5℃	13
3	狂奔4尾。(朝)浮上遅し、15min后大群 浮上、餌付やゝ活潑。(昼、夕)極めて活潑。 最高水温31.5℃	18
4	(朝)浮上やゝ良好。ハダカイワシ投餌では餌 付活潑なるもカタクチでは悪し。 (夕)餌付活潑。狂奔魚みらる。 最高水温30.5℃	5
5	(朝)大群池奥を游泳。カタクチは好餌せず、 ハダカイワシでは極めて良好。最高水温30.0℃ (夕)餌付やゝ良好。中央部の小群悪し。 狂奔1尾、東風強し。	6
6	(朝)ハダカイワシ、カタクチ混投与で餌付や や活潑。カタクチのみでは悪し。 (夕)餌付極めて活潑。アヂもそのまゝ摂餌。 東風強し	0
7	(朝)浮上遅し(約10分)ハダカイワシ混で 餌付極めて活潑。 (夕)水門寄りに浮上。餌はアヂが主なるも極 めて活潑。東風強し。最高水温29.5℃	0
8	(朝)投餌当初、餌付悪し、後半にかけて良好。 10頃池奥に大群游泳。 (夕)水門近くで大群浮上。斃死直前の黒色魚 にメバチヅラミ3尾寄生。最高水温28℃	1

日	記 事	斃死
9	(朝) (夕) 共に餌付極めて活潑。終日東風強し。最高水温 28°C	1
10	(朝) (夕) 共に浮上早く餌付極めて活潑。水門近く4~5m半径内に浮游物あり、ブリ浮上悪し。清澄な処では良好。	0
11	午後西風となり池内海水やゝ濁濁。魚群は水門寄りに浮上、餌付活潑。最高水温 29.8°C	0
12	(朝) 張潮時、海水清澄、浮上よく餌付極めて活潑なるも(夕)浮上、餌付共やゝ悪し。夕~夜 雷雨あり	0
13	(朝) (夕) 共浮上よく餌付極めて活潑。狂奔魚みられず。最高水温 29.5°C	0
14	前日に同じ。午後東風強し。最高水温 28.5°C	0
15	東風強し。(朝) (夕) 共に水門寄りに浮上。餌付活潑。池外やゝ濁濁。黒色魚5~6尾みらる。	0

〔概況〕 月初めの小潮時、斃死がやゝ多く高水温と共に餌付悪く危険状態を呈したが、5日からの東風連吹で低水温となつて餌付活潑になるにつれ斃死もみられなくなつた。

例年8月中旬は最高水温時であるが、今年は台風接近で東風強く上旬より低水温となつてブリ生育にも幸いしたようである。

8月後半期

日	記 事	録 死
16	海水や、濁するも浮上よく餌付極めて活潑。 透明度5.5m 東風強し。最高水温30.0℃	
17	(朝)(夕)共に水門近くに浮上、餌付かなり活潑。池内外海水濁。最高水温29℃ 時々雨。東風強し。	
18	(朝)落潮5合目、水門近くに大群游泳、最初餌付活潑なるも次第に不活潑。 (夕)カタクチのみ投与では餌付不活潑。 ハダカイワシ混で活潑。表層低かん。 1.0m層酸素28.9%	
19	(朝)浮上遅し。餌付かなり活潑なるも水門近くのみ游泳。 (夕)も同じ。餌付悪し。海水の濁著し。 東風強し。時々雨。最高水温27.5℃	
20	(朝)水門近くを浮上游泳。餌付極めて活潑。 黒色魚5~6尾みらる。 (夕)餌付かなり活潑。海水や、濁。 最高水温26.5℃ 東風強く時々雨。	
21	(朝)(夕)共に浮上早く、餌付極めて活潑。 (朝)は魚群池の奥まで投餌船に追隨して索餌。 海水や、清澄となる。透明度5m。	
22	(朝)堤防近くでキビナゴ(小)を追跡游泳していた。餌付極めて活潑。 (夕)水門近くに浮上早く餌付極めて活潑。 透明度6m。	
23	海水清澄となる(透明度8.2m) (朝)(夕)共に浮上早く、餌付極めて早し。 午後、西風強し。	
24	(朝)(夕)共に餌付や、緩慢。水門近くのみ游泳。	

日	記 事	斃 死
25	(朝) 海水清澄。浮上早く餌付極めて活潑。 (夕) 海水やゝ濁。浮上早けれど餌付やゝ緩慢 (ハダカイワシ混)	
26	(朝) 海水清澄。浮上早く餌付極めて活潑。 (夕) 海水やゝ濁、浮上、餌付良好。 投餌船への魚類集は大型魚が船の下又は船に近く、小型魚は周囲を回遊。	/
27	(朝) 海水清澄。浮上かなり早く、餌付極めて活潑にして、池奥まで投餌船に追隨。	

【概況】 海水の濁によつて魚の浮上が遅いことが屢々あつたが、水温の降下で餌付は極めて活潑となり、7月～8月初めにかけての危険状態を漸く脱した。

○生育魚の大きさ

魚体測定は、毎旬初めに実施する予定であつたが、種々の事情で難しく、結局 池に放流するとき測定することとした。后には魚を傷つけることを少なくする意味で斃死魚のみ測定して、大体の成長度を把握することにとどめた。

月 日	全長 (TL)	尾叉長 (FL)	体 重 (BW)
4.23		15~70 <sub>mm</sub>	0.3~0.5 gr
5.25 (受入当時)		30~90 <sub>mm</sub>	0.5~8.0 <sub>g</sub>
6.16 (池放流魚)			9 <sub>g</sub> ~20 <sub>g</sub> 3.4~7.5 gr

月 日	全長 (T L) mm	尾又長 (F L) mm	体重 (B W) gr
6, 17 (小型魚)			1.6g~1.7g 6~6.4
7, 1 (放流魚の中で小型のもの)			4.9 gr
" (小型魚)			6~1.5
7, 11 (放流魚の中で小型魚)			5.0 gr
" (放流魚の平均)			5.5~6.2, 5
7, 19 (以下、池内斃死魚)		176	7.2, 5
"	228	204	114.0
"	192	175	60.0
7, 20		195	90.0
"		174	64.0
"		178	70.0
"		230	140.0
7, 22	182	167	54.0
"	205	196	95
7, 23	235	212	108
"	180	163	54
"	195	175	52
"	263	239	188
"	200	189	65
"	187	180	55
7, 24	232	208	106
7, 25	245	221	128
7, 29	230	200	96
"	250	232	105
"	233	209	154
7, 30	240	215	220

月 日	全 長 ㎝	尾 叉 長 ㎝	体 重 g
7, 30	130	115	40
"	140	120	45
7, 31	310	285	340
"	260	245	1245
"	240	230	140
"	280	250	300
"	300	280	230
"	220	200	130
"	—	—	250
"	—	—	80
"	—	—	270
"	—	—	150
"	—	—	120
8, 1	255	230	200
"	230	210	150
8, 2	280	257	260
"	245	223	200
"	273	248	270
"	235	217	190
"	230	215	170
"	260	243	198
8, 3	260	233	230
"	263	242	220
"	265	245	220
"	290	260	260
"	265	240	220
"	308	275	315
"	285	260	258
"	240	220	147
"	215	195	112
"	185	170	68
8, 4	245	225	160
"	220	200	112

月 日	全 長 ㎖	尾 又 長 ㎖	体 重 gr
8, 4	280	250	237
"	245	220	150
8, 8	255	235	163

8月下旬の測定結果が少ないので 9月4日 36尾、10月12日 約50尾 取揚げ測定したものを参考として成長グラフに書いて8月下旬の成長を推進することとした。

(9月以降の測定は何れも 永山改良普及員による)

7月20日 平均100gr、30日190gr、8月10日310gr、20日410gr、30日550gr と順調な生育を続けている。

全国平均と比較してみると 7月下旬までは小さいが、これは採捕魚の小型であつたことによるものと思われる。

8月10日には平均310gr となつて、全国平均に等しく以後は餌付の活潑化と共に全国平均を上回る良好な成長を辿っている。これは投餌率の大きいことによるものか、あるいは餌料の転換効率の高いことによるか、自然環境に影響するか、その点現段階では何とも云えない。

蓄養ブリの8月上旬頃までの体長と体重の関係は別図のとおりである。

体  
重

g r

340

320

300

280

260

240

220

200

180

160

140

120

100

80

60

40

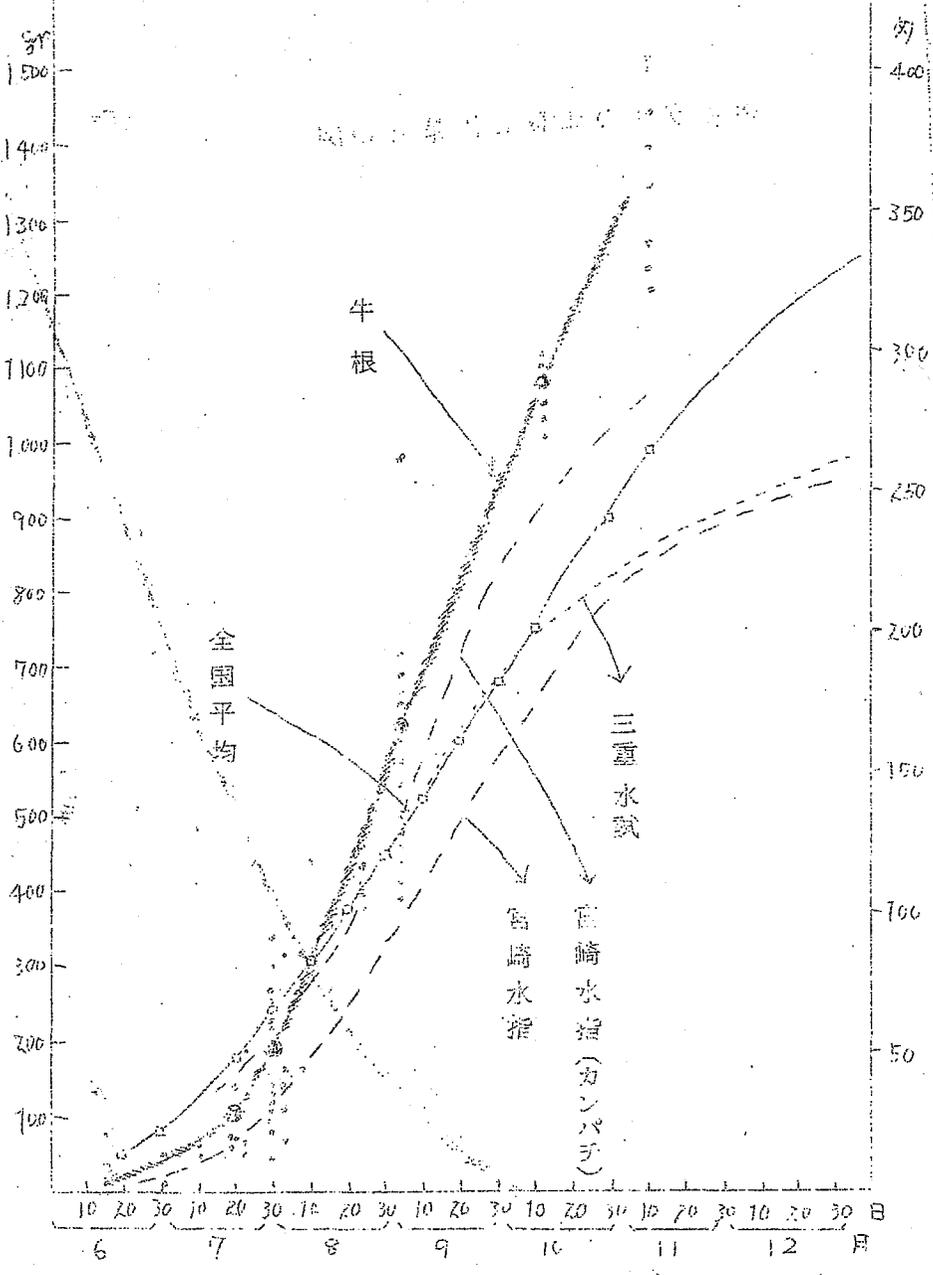
20

蓄養ブリの体長と体重との関係

40 60 80 100 120 140 160 180 200 220 240 260 280  
体長(尾叉長) mm

# 生育魚の成長

(○) (太印=平均)



## § 考 察

今年のブリ稚魚管理にあたっては、試験も実施前に、①「6月下旬から8月にかけての高水温期が最も危険な状態となつて、この時期を何とか切り抜ければ、後は水温の低下に伴つて順調な生育がみられるもの」と予想していた。②事実、予想は的中して、8月までは正に一喜一憂という状態が続いた。管理に不慣れということもあつて、紆余曲折、眞に骨折りのくたびれ儲けというようなことも屢々で、余りにも魚を取殺しすぎた感がないでもない。(網替え、選別、尾数算定等)

折角、難儀して採捕した多くの稚魚を斃死、あるいは共喰等によつて矢つたことは遺憾に堪えない。今年の試験を基礎として、来年以降は、更によりよい管理ができるものと思う次第である。

試験を通じて痛感された点は、

- ① 第1に種苗の問題である。  
即ち、大きさの揃つた稚魚を短期間に必要量だけ確保すること。これによつて養殖の成否の半分は決定されると云つても過言ではないだろう。
- ② 小型網による餌付けから放流までの蓄養はできる限り短期間にとどめて、少なくとも8月中旬までには、池に放流できる状態にあること。
- ③ 投餌において、6月まではできるだけ回数多く与えること。これは共喰を防止する意味で大要と思われる。
- ④ 投餌量の急変を極力、避けること。  
特に急増は避けるべきである。

⑤ 選別は是非必要である。

そして、適切な方法を検討しなければならない。

(ブリ稚魚は動きが早く、活潑であるので、魚体を傷つけないようにしなければならない。)

⑥ 小潮時の高水温期は特に危険な状態となり易いので、小型網で蓄養の際は、潮の流通のよい処で行うべきこと。

⑦ 該蓄養池は、現在、水門一個あるだけで、堤防熔岩のすき間から、ある程度の潮の交流が行われるものゝ、小潮時には良好な状態とは云えないので、水門を増設して、潮の流出入を促進すべきである。

等の点である。

この外、今年試験できなかつたが、蓄養当初における投餌方法(量、回数、時間等)には、今後、更に検討しなければならない多くの問題があるようである。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
 ☆ 各 部 日 記 ☆  
 ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

○ 漁 業 部 日 記

- 1 2 月 5 日 週間漁況
- 1 2 月 6 日 「かもめ」汚水調査のため志布志沿岸へ………8日まで
- 1 2 月 7 日 「東海さば」魚体測定
- 1 2 月 1 0 日 「かもめ」第9次集団操業指導のため七島近海へ
- 1 2 月 1 2 日 週間漁況
- 1 2 月 1 4 日 「照南丸」南方まぐろ漁業試験より大阪へ入港（水揚）
- 1 2 月 1 6 日 「東海さば」魚体測定
- 1 2 月 1 9 日 「かもめ」七島近海より帰港予定  
週間漁況
- 1 2 月 2 0 日 「照南丸」大阪より帰港予定
- 1 2 月 2 1 日 「東海さば」魚体測定
- 1 2 月 2 4 日 「照南丸」入渠（山川）
- 1 2 月 2 6 日 週間漁況
- 1 2 月 2 8 日 御用納め

○ 調 査 部 日 記

- 1 2 月 3 日 牛根蓄養場ハマチ一部採捕  
平均魚体重 490匁

12月 6日～8日

肝付川澱粉廃液調査

○ 養殖部 日記

12月 5日 県淡水養魚場起工式（大口市）

12月 9日 養マン池調査及び水質分析  
（沈 崎）

12月 23日 クロチヨウガイ半径真珠浜場  
（予 定）

月 間

○のり養殖調査指導

各地に芽イタミ発生、可成りの  
被害ある模様

○クロチヨウガイ組織切片作成

○ツキヒガイ熟度調査

○Chaetoceros sp 培養

○ 製造部 日記

12月 1日 さば罐詰委託製造開始

来訪・吉留食品KK鹿児島工場長  
上記作業の監督として

12月 2日 来訪・沈崎市業者 立石 勝氏  
塩干業の動態調査のため

12月 3日 来訪・吉留食品KK社長、専務、  
委託製造の現場視察

来訪・谷山市村崎加工場主 冷蔵  
工事作業の経過連絡

12月 3日 来訪・漁運春口技師 寒天製造（機械凍結）  
様式調査

12月 5日 魚肉ソーセージ製造

12月 7日～8日  
本下技補 東串良町へ出張

（水質調査のため）

12月 10日 来訪・鹿児島県カツオ、マグロ漁業協同組  
合、専務、総務部長

カツオ業動員連絡のため

12月 12日～13日  
魚肉ソーセージ製造

12月 14日 来訪・指宿市加藤氏、わかさぎのクレハロ  
ン詰加工について指導方要請

☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆密☆美☆短☆信☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆

（1960年の回顧）

ゴールデンレインのキャッチ・フレーズで華々しく騒  
ぎをあげた1960年も、6年続きの盛作、1300円突破の  
タウという名の探偵、1億ドルの保有外貨と、数々の経済  
記録を打ち立てた高原景気の狂ソウ曲に送られて、目出度く  
幕を閉じようとしている。

初鹿景気、岩戸景気に引続き高原景気と、9%の経済成長

に所得倍増の夢を乗せて、次は何という名の景気となることやら。

中央における夢のようなゴールド・ラッシュの便りも、さい果ての島々には、ほんのちよつぱり香りをかがした程度で過ぎ去つて了つた。

南国の真紅の太陽に、新春の決意を誓つたのは、ついこの間と思つたのに、もう巷には、シングルベルの音が流れている。げに光陰は矢の如し。

機関紙の当番が廻つて来たのを機会に、しばし世俗を離れ、薄闇迫る高地山峠に、古仁屋の街を見下しながら、過ぎしノ年を回顧して見る。

※ 先ず特筆すべきは、古仁屋の街の復興振り。再起を危まれた大火から僅か2年足らず。古仁屋の街は完全に復旧した。いや旧に復したのではなく、新しい街が誕生した。色とりどりに美しく粧いを凝らした建物、完成してゆく道路、公園等の都市計画。

大火前の古仁屋しか知らない人が、現在の姿を見たら、その変ボウ振りに驚くことであろう。現在、古仁屋の美観を損い、近代性を拒むものはむしろ、焼け残りの災害を免れた地区であるという皮肉な現象を見せている。

※ 次に黄金景気とまではゆかないが、かうお節ブームが大島の水産業にかなりの刺激と、活を与えたことも忘れてはなるまい。

本土におけるかうおの不漁を尻目に、大島のかうお漁のすべり出しは極めて快調、品不足をはやして、かうお節の価格はうなぎ昇り、遂にダウ価に迫る千円大台乗せ

(キロ当り)は必至の状況となつた。これで今までの不況は一挙挽回、節成金も出るのではないかと思われたが、好いことは続かぬもの、すべり出しの好調も、かんじんの7、8月の中だるみから、終漁には完全な尻つぼみとなつて、総体的には、平年の2〜3割増に留つた。

それでも価格の高騰は、永年の沈滞に青息吐息の節業者にかなりの潤いを与えたことは間違いなく、さしずめ、シルバー・エージといつたところ。

※ 待望久しかつた照国丸の代船 八坂丸が就航した。僻地の第1条件が交通の不便にあるとすれば、従来交通、交流の便利が倍になるということは、何にもかえ難い進歩、発展であろう。

来島早々一べんに8日分の新聞が投げ込まれたり、鹿児島からの便りが半月もかかつたり、野菜、食料品類が店頭から姿を消すなど随分戸惑つたことなど、一日も早く、夢物語りとしたいものだ。アメリカやヨーロッパにさえ気軽に行ける現代だ。文化も経済も、気軽にゆきまできる交通、交流によつて高まつてゆくのではなからうか。

八坂丸の就航を喜ぶと共に、更に、スピード時代に相応しい航空網の実現と充実が望まれる。

※ 今年、物すごいハブの当り年(という気がして専門家に伺つた処 例年よりちよつぱり多い由)200尾に余るハブに接した。(尤も、この中の90%は捕獲されたハブの受け渡し試験場横の旧役場大通りで行われたためであるが)着任一年目の昨年は遂に1尾にも見参できず豚肉の款をかこつたものであるが、今年は、堪能するだけ見せて

貰った。単に捕えられたものばかりではない。8月末の夜半には、我が家の門前を襲ったノミ半にも及ぶ金ハブを見事退治した。分場課本室のフォルマリン漬ハブはその戦果である。新任者を、住宅に案内の途中、目の前で捕獲人がハブを手づかみで捕え上げた時はこつちも驚いたが、新来者はさぞ肝を潰したことだろう。(彼はその後も、帰宅の途中、薄闇の中にハブをけとばす武勇伝を残して、鹿兒島へ引揚げた) 10月には8技師宅の縁側に、のこのこ上り込んだ奴が首を締められた。

ひと頃、イタチやマンパースを導入してのハブ退治が派手に報ぜられていたが、今は余りそんなことを聞かなくなつた。ハブで生計を樹てている捕獲人や、立派な土産品などが出廻っている処を見れば、或いは貴重な資源にでも昇格したのか。併しハブの存在が好ましくないことは、ことが人命に関するだけ否定できない。或る人がハブ絶滅の秘訣を教えてくれた。それは現在の買上値(1尾200円)を2、3千円以上にすればハブはたち所にいなくなりますよと。成る程、ハブだけではない。水産業その他リヤクダツ産業の資源枯渇に通ずる原理だ。

※ 今年はずしく台風が姿を見せなかつた。上陸の気配を見せたり、接近により多少の影響はあつたが、本隊の上陸を見なかつたことは、台風銀座という有難くないニツク・ネームを頂戴している大島にとつては、稀有のことであろう。お陰で何時も台風をまともに受ける漁業や農業が被害を免れたことは特筆すべき朗報であつた。

※ 着任前、大島は雨が多いと聞かされていたものだが、

今年は、非常に少なかったようだ。お蔭で、スポーツやレクニツク等の屋外レクリエーションには極めて好都合であつたが、反面水の不足により、水道は時間給水、電灯は、電圧の低下、停電と復興前の大島に逆戻り。家庭の主婦連の被害は極めて甚大であつた。雨が少なかったことは、前項の台風のこなかつたことにも関連があるとかで、水の最も戀しい8、9月には、雨を待つて来てくれるなら、少し位の台風はガマンしますとささやく声もあつたとか。

兼 分場内部においては、各係の専業は予定通り順調に進捗し、職員の趣味と知識の向上を図るための読書会（名称雨読書会）も発足。毎月、県立図書館（奄美分館）の巡回文庫指定団体となつた。

その他職員の健康と、レクリエーションを兼ねてのスポーツには全員が力を合わせ、僅か9人の構成人員にも不拘職域チームとして凡ゆる競技に活躍、特に、町内における卓球の選手権獲得については、既にこの欄で紹介した通りである。

7月の異動で4人の同僚を送り出し、2人半の新任者を迎えた（兼務は半人）。年々オ々人同じからず。

交流は沈滞を拒み、清新の気を注入する。社会や人生にとって恐ろしい情性、無気力、虚無、怠慢は慣れ過ぎのマンネリズムによることが多い。

兼 クチビルをかみしめる憤りも、嗚咽こみあげる悲しみも砂をかむ味気なさも、過ぎ去れば美しい追憶のグエールに包まれ、喜びや楽しみは、ふくいくたる花園となつて人生絵巻に彩を添える。

追憶の三昧境に浸つて、時の経つを忘るれば、しのび寄る闇は、何時しか峠を覆い、ハブ恐怖の悲情な現実に連れ戻される。辛いこともあつた。楽しいこともあつた。然しそれが人生なのだ。如何に辛くとも、齒を喰いしばつて堪えよう。苦しみのあとには楽しみがあるはずだ。

歡喜に有頂天になることも慎もう、知性を疑われる行動は公務員として、とるべきではない。

瀧古知新。回想は楽しく、反省は人生にとって必要なことだ。然し、過去に恋々とすることも男子の本懐でない。あくまでも過去は思い出であり、参考に過ぎない。

どうぞ、これからの我々の生き方を見て下さいという、新しい年を迎える決意をもつて、稿を閉じると共に、よき年であつた1960年へのはなむけとしたい。

ではさようなら 1960年。

A・I

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
 ☆ 分 場 日 記 ☆  
 ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

10月 9日～12月10日

かつお節製造試験

11月 1日～12月10日

まべ人工採苗 (油井)

11月17日 岩元水産課長、久保園係長来場

11月17日～12月16日

きびなど、飛魚調査 (鹿児島)

11月26日 会計課上ノ園係外2名来場

12月 1日～ 5日

はなやなぎ調査 (徳之島)

12月 6日～ 7日

上妻漁政課長補佐、山崎主事来場

12月19日～ ひとえぐさ網ひび建込み

- ◎ 農林漁業基本問題調査会が營々たる努力の結果として、去る10月末に政府に提出した「漁業の基本問題と基本対策」なるものを見るに、来年は多事多端の年となりそうだ。
- ◎ 現行免許可制度とか漁業の就業構造、経営構造に対する批判など、どの一つをとり出してみても、容易ならぬ重大事ばかり。しかもこれらの改善を焦眉の急なりと告げている。
- ◎ 昔ならば御政道の批判は出る釘のように頭を打たれたらうに、近頃では、公の機関をこさえてまで建議させる有難い御時勢。  
他人の勇み足をあげつらふなどは愚の骨頂。
- ◎ 目で見、耳できく、肌で感じたことを存分に口で云い、手で書く鼓腹撃ツヨウのみ民われでありたい。
- ◎ 本号はブリ蓄養特輯号の形となつてしまつたが、肥満度の高い500匁の蓄養ブリをお歳暮とする次第。